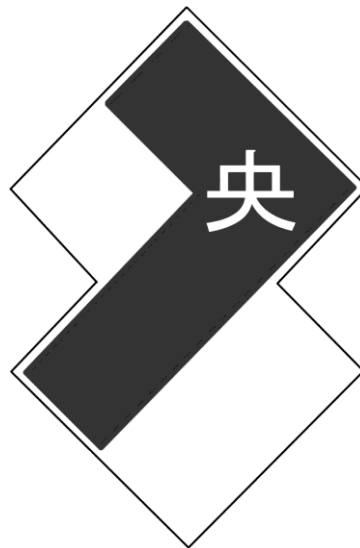


令和4年度
研究集録

蒼 岡

第 3 0 号



栃木県立足利中央特別支援学校

新しい学習指導要領が、小・中学部で全面実施となりました。そして高等部では令和4年度から年次進行で実施されます。改訂の基本方針には、「社会に開かれた教育課程」「育成をめざす資質・能力の明確化」「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進」「カリキュラムマネジメントの推進」などといったキーワードが並んでいます。また、令和3年1月には、中央教育審議会が「令和の日本型学校教育」の構築を目指して答申を出し、同月には「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告」が出されるなど、特別支援教育全体の今後の方向性が矢継ぎ早に示されました。さらに、令和3年9月に特別支援学校設置基準が示されたことも、特別支援学校教育を巡る大きな前進であります。その一方、令和4年3月に、「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会報告」がまとめられました。私たちは、新しい時代の特別支援教育に求められる資質を、改めて捉え直すことが必要になってきています。

このような中で令和4年9月には、国連が日本に対して、分離教育の是正を要請したことを忘れてはなりません。我が国のインクルーシブ教育の推進は、世界規模からすると未だ課題が多いと言うことを指摘した出来事です。

さて、新型コロナウイルスは次々と変異しながら、収束が見えてきません。人の移動や対面の自粛が数年続き、教育活動全般も様々な影響を受け続けています。本校でも国や県の方針に従い、地域の状況を勘案しつつ「教育活動を止めるな」の意思を掲げて進んできました。様々な制約のある中での蒼崗の発行は、率直に言えばハードルが高かったかもしれません。令和3年度、4年度と2年間に及ぶ研究の成果は、自立活動、生活単元学習、職業教育と幅広い上に内容も洗練されており、本校教員の子供としっかり向き合う姿が目に見え、心でまわります。「そこに教育の有る限り、研究活動は継続される」という教職員の熱意を、校長として十分評価しつつ、巻頭言とします。

時代は進んでいます。メールなどによる投稿でも結構です。どうぞ忌憚のない御意見御指導、そして御感想をいただけると幸いです。

名称「蒼崗」の由来

かつて、足利の大月町と利保町の境界に沿って小高い山があり、マンガン鉱石や土砂を採掘していたという。この山は、一部を残しほとんど削り尽くされた。この後を整地して本校が建設された。屋根・外装・内装のすべてを、スクールカラーと定めた緑系の色調で統一して、明るく安らぎのある校舎が建った。明るい学校という願いを込めて、安藤校長（初代）の作詞による本校校歌の中にも「緑の丘」と歌い込まれている。こうすることで、本誌の名称をやはり安藤（初代）校長が緑の丘の意味で「蒼崗」と命名した。（蒼崗第1号あとがきより抜粋）

目 次

巻頭言

I	自立活動の指導における実態に即した指導内容の設定と主体的な取組を促すための指導方法の工夫及び評価の在り方 ～自立活動シートを活用した目標設定と指導実践～	・ ・ ・	4
II	生活単元学習の進路分野について、各学年の系統性を踏まえた 授業実践と評価	・ ・ ・	8
III	自立活動シートを活用した目標設定と指導実践	・ ・ ・	1 4
IV	職業教育に関する授業実践	・ ・ ・	1 9
	あとがき	・ ・ ・	2 5

※ 研究グループの研究実践については、一部抜粋や概要等での報告である。

I 自立活動シートを活用した目標設定と指導実践

小学部（通常学級）

1 研究主題

自立活動の指導における実態に即した指導内容の設定と主体的な取組を促すための指導方法の工夫及び評価の在り方

～自立活動シートを活用した目標設定と指導実践～

2 研究主題設定の理由

自立活動の指導は、障害による学習上または生活上の困難を主体的に改善・克服しようとする取り組みを促す教育活動である。指導に当たっては、個々の児童の障害の状態や発達段階の的確な把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、指導の目標及び内容を定められる。適切な実態把握は指導の出発点であるため、多視点から情報を収集し、指導すべき課題の整理がしっかりと行われるようにしなければならない。

本校では令和2年度に本校版「実態把握シート」の作成に着手し、個別の指導計画作成において活用できるよう整備を進めてきた。方法として、指導グループごとの事例検討会で指導の目標や内容、手立て等を検討し、指導実践の振り返りや評価を行う中で、実態把握シート活用上の課題や改善点などを挙げていった。そこで本研究では、前年度の取り組みを継続・深化させるために、本校児童の実態に合わせた、より活用しやすい実態把握シートの作成に向けて、挙げられた課題や改善点を集約し、改訂を進めていきたい。

また、実態把握シートにより洗い出した児童の課題を、適切な指導につなげていけるよう、「実態把握→目標→指導実践」の検証を行いたいと考えた。

その際、事例検討会において、児童が主体的に取り組む、成就感を味わうことができるような指導内容にするための手立てを共有し、指導の改善・充実を図っていきたいと考え、本主題を設定した。

3 研究目的

- (1) 「自立活動シート」の改訂版を作成・活用することで、児童の実態を適切に捉え直す。
- (2) 整理された指導すべき課題（中心的課題）から、どのように指導目標を決定していくか、事例検討会を通して実践研究する。
- (3) 事例研究を通して、指導目標や指導内容、指導場面などの指導実践を適切に評価し、改善を図っていく。

4 研究方法及び計画

- (1) 期間 令和3年4月から令和5年3月まで
- (2) 組織

ア 小学部・中学部の通常学級の教師を6つのグループに分け、1グループが自立活動の1区分を担当して改訂版「実態把握シート」の内容・文言を検討する。

イ 小学部通常学級の各学年において事例研究に取り組む。

(3) 内容

ア 小・中学部通常学級の児童生徒に適した「自立活動シート」を作成する。

イ 各学年で対象児童を選出し、改訂された「自立活動シート」を活用しながら、実態把握から指導目標を設定するまでのプロセスに重点をおいて研究する。

ウ 明確になった目標をもとに、具体的な指導内容、指導の手立て、指導体制を検討し指導実践を進める。その際、事例検討会において指導計画の妥当性を検討し、指導の効果を評価する手続きをグループで共有しながら実践を検証する。

エ イ・ウの実践を考察し、成果と今後の課題について検討する。

5 研究の実際

(1) 小学部通常学級版「自立活動シート」の作成

グループに分けて担当項目の検討及び実態把握シートの文言改訂作業を進めた。

以下に、本研究において作成した「小学部版自立活動シート」(一部抜粋)を掲載する。

ア 健康の保持

健康の保持					
○ 0	△ 0	× 0	目次へ	次へ	Macro
①生活のリズムや生活習慣の形成に関すること				評価	補足説明
【生活】覚醒と睡眠の生活リズムが整っている				○ △ ×	1
【生活】胸や腹を大きくゆったり動かして深い呼吸をすることができる				○ △ ×	2
【生活】食べ物をかんで食べることができる				○ △ ×	3
【生活】喉が渴いたら、必要な水分をとることができる				○ △ ×	4
【生活】排泄リズムが整っている				○ △ ×	5
【生活】トイレで排泄できる				○ △ ×	6
【生活】尿意、便意の意思を表出することができる				○ △ ×	7

イ 心理的安定

心理的な安定					
○ 0	△ 0	× 0	目次へ	次へ	Macro
①情緒の安定に関すること				評価	補足説明
【情緒】喜怒哀楽の感情それぞれを何らかの方法で表出できる				○ △ ×	1
【情緒】好きな活動があり、集中して取り組むことができる				○ △ ×	2
【情緒】初めての活動に対して、安定した気持ちで取り組むことができる				○ △ ×	3
【情緒】過去に失敗したことのある活動に対して、安定した気持ちで取り組むことができる				○ △ ×	4
【情緒】行動の修正を求められたときに、落ち着いて受け入れることができる				○ △ ×	5
【情緒】こだわっている物事から離れても安定した気持ちでいることができる				○ △ ×	6
【情緒】怒りや悲しみ、不安の感情を引きずらないで気持ちを切り替えられる手段がある				○ △ ×	7

ウ 人間関係の形成

人間関係の形成							
○	△	×	目次へ	次へ	補足説明	Macro	
0	0	0					
①他者との関わりに関すること				評価			
【他者基礎】 特定の教師からの働きかけを受け入れて行動できる			○△×				1
【他者基礎】 特定の教師以外の教師からの働きかけを受け入れて行動できる			○△×				2
【他者基礎】 大人の注意を引く行動がある（適切な注目行動）			○△×				3
【他者基礎】 身体接触、歌、物などを媒介に人とやりとりができる			○△×				4
【他者基礎】 褒められていることがわかる			○△×				5
【他者基礎】 友達への関心がある			○△×				6
【他者基礎】 クラスの友達と手をつなぐことができる			○△×				7

エ 環境の把握

環境の把握					
○	△	×	目次へ	次へ	補足説明
0	0	0			
①保有する感覚の活用に関すること				評価	
【保有感覚】触れあいや揺れの働きかけを感じて、快・不快の表情をする			○ △ ×		1
【保有感覚】人から触れられても拒まない また、自分から人に触れることができる			○ △ ×		2
【保有感覚】自分からいろいろな物に触れ、それらの感触を受け入れることができる			○ △ ×		3
【保有感覚】道具などを使った動き（前後・上下・左右の揺れ、回転）に応じて身体を使うことができる			○ △ ×		4
【保有感覚】人や物を注視したり、追視したりできる			○ △ ×		5
【保有感覚】特定の人の声や自分に関係する音に注意を向けることができる			○ △ ×		6
②感覚や認知の特性についての理解・対応に関すること			○ △ ×		7

オ 身体の動き

身体の動き						
○	△	×	目次へ	次へ	補足説明	Macro
0	0	0				
①姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること				評価		
【運動基本】ふらふらせず、その場で立ち続けることができる				○△×		1
【運動基本】肘をついたり、体を物に預けたりしないで、椅子に座っていることができる				○△×		2
【運動基本】さまざまな姿勢で移動できる（四つん這い、横歩き、後ろ歩き、前跳び、スキップ、ケンケンなど）				○△×		3
【運動基本】サーキット運動のように、さまざまな姿勢に変わりが連続して運動することができる				○△×		4
【運動基本】手足や身体を自分で意識的に曲げ伸ばしできる				○△×		5
【運動基本】両足を揃えて跳ぶことができる				○△×		6
【運動基本】三輪車や自転車に乗って、ペダルをこくことができる				○△×		7

カ コミュニケーション

コミュニケーション						
○	△	×	目次へ	次へ	補足説明	Macro
0	0	0				
①コミュニケーションの基礎的能力に関すること					評価	
【コミュ】 いろいろな刺激に対して、快・不快の表出ができる			○	△	×	1
【コミュ】 話しかけている相手や相手の示している物を見ることができる			○	△	×	2
【コミュ】 指さしや身振り、具体物の提示により求められていることを理解しそれに応じた行動ができる			○	△	×	3
【コミュ】 要求があるときに何らかの手段で伝えようとする（クレーン）			○	△	×	4
【コミュ】 要求があるときに何らかの手段で伝えようとする（発声）			○	△	×	5
【コミュ】 要求があるときに何らかの手段で伝えようとする（指さし）			○	△	×	6
【コミュ】 要求があるときに何らかの手段で伝えようとする（絵・写真カード）			○	△	×	7

(2) 指導実践

各学年1事例ずつの6つの事例研究を進めた。(個別の事例のため掲載せず)

6 まとめと今後の課題

自立活動における指導に当たっては、児童の的確な実態把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、目標や指導内容を定めることとする。そこで、個々の児童の実態を把握し、具体的な指導内容の設定ができるよう、令和3年度と令和4年度の2年間にわたり、「自立活動シート(実態把握シート・課題抽出シート)」の作成に取り組んだ。そして、「自立活動シート」が本校の実態に即した内容になるよう、活用しながら改訂を行った。

研究目的の一つである「自立活動シートの作成・活用」では、すでにあった「実態把握シート」を本校の児童の実態に即した内容になるよう、チェック項目の文言の見直しを行った。方法としては、チェック項目が6区分に分類されていたため、全教員が6グループに分かれ、それぞれが1区分を担当し、日々の指導場面で活用しやすいよう、チェック項目を系統的に並べ替えたり、具体的な要素を加えたりした。そして完成した「改訂版実態把握シート」のチェック項目に沿って、児童を「できること・支援があればできること・できないこと」に評価し、児童の全体像を的確に把握することができた。実態を把握することによって児童が抱えている課題が明白になり、「課題抽出シート」を活用して中心となる課題を絞ることができた。そして、各学年で構成された事例検討会で、児童の実態について共通理解を図ることができた。

二つ目の研究目的である「どのように指導目標を決定していくか、事例検討会を通して実践研究する」では、始めに、学年で児童を一人抽出し、担任が「自立活動シート」を活用して実態把握を行った。次に、担任が設定した目標や指導内容、手立ての妥当性について事例検討会で話し合いが行われ、その内容を基に、目標の見直しを行い、継続して指導にあたった。事例検討会では指導場面の映像を用いて話し合いを行ったため、指導中には見えていなかった児童の動きや表情に気付くことができ、活発な意見交換を行うことができた。

三つ目の研究目的である「指導実践を適切に評価し、改善を図っていく」では、「自立活動シート」を活用して指導を実践したことによる児童の変容と、今後の課題について、事例検討会で情報を共有した。「自立活動シート」を活用したことで児童の適切な実態把握ができ、目標や指導内容、手立てを整理できた。また、今後の課題を明確にすることができ、次の目標へつなげることができた。

本研究では、「自立活動シート」を作成・活用し、事例検討会を行ったことで、児童の適切な指導につなげることができた。ただ、自立活動シートを活用したことに好意的な意見が上がった一方で、チェック項目の評価の判断については、補足説明を検討し追加する必要があることが分かった。自立活動シートを活用することで、どの教員も児童の実態と課題を把握することができる。自立活動シートが本校の児童の実態に即した内容であるよう、必要に応じて改訂を行いながら、今後も指導に効果的に役立てていきたい。

Ⅱ 生活単元学習の進路分野について、各学年の系統性を踏まえた授業実践と評価

中学部通常学級

1 研究主題

生活単元学習の進路分野について、各学年の系統性を踏まえた授業実践と評価

2 研究主題設定の理由

中学部では、これまでキャリア教育全体計画の「学習を通して身に付けた知識や技能の定着を図り、実生活に生かそうとする態度を育てる」を学部目標に定め、進路学習の単元を扱う作業学習、職業・家庭、生活単元学習、の三つの教科を対象として研究を進めてきた。令和元年・2年度においては、職業・家庭と生活単元学習を対象に、学部内で課題として挙げられてきた、授業内容の重複について取り上げ、年間指導計画や具体的な目標の見直しと学年間、教科間共に系統性を踏まえた学習内容の整理を行った。

本研究は、上記の研究を継続し、学習指導要領の段階に基づいた(1)知能及び技能、(2)思考力・判断力・表現力、(3)学びに向かう力、人間性等の三つの観点を含む目標を軸に、職業・家庭と生活単元学習の内容をすみ分け、精選した新たな指導計画に基づいて2年間の授業実践を行ったものである。3学年に共通し、中学部の進路学習の大きな柱となる単元である、生活単元学習「進路について考えよう」に特化して研究を行うことで、学部全体での進路学習の系統性を確立することができると考え、このテーマを設定した。

3 研究方法及び計画

(1) 研究期間 令和3年4月から令和5年3月まで

(2) 研究組織

中学部通常学級の中で一つの主題を設定し、生活単元学習の「進路について考えよう」の単元担当教員を中心に各学年で取り組む。

(3) 研究方法

- ① これまでの研究により、精選した新たな指導計画について学部全体で共通理解を図る。
- ② 今年度の生徒の実態に合わせて、具体的な展開計画や時案、教材を作成する。
- ③ ②に基づいて授業実践を行う。
- ④ 学年ごとに授業の振り返りを行い、検討会を通して授業評価を行う。
- ⑤ 評価から得た今後の課題や改善点についてまとめ、学部全体で共有し、次年度に引き継ぐ。

4 研究の実際

(1) 中学部の進路学習について

①進路学習における課題と改善の経緯

これまで、職業・家庭の職業分野と生活単元学習の学習内容に重複する部分があり、課題となっていた。具体的には、仕事の意義や態度、卒業後の進路といった働く意義にあたる内容が両授業に含まれていたことである。年間指導計画上においても、高等部の生活や学習内容について扱うのか、働くことに重きを置いて就労について学ぶのかなど、「中学部卒業後」の、どの部分を切り取って学習をするのかが明確ではなかった。その年度によって扱う内容にばらつきがあり、系統立ったものとはいえなかったため、3年間を通して段階的に進路学習ができるよう再構築し、以下のように改善してきた。

②年間指導計画改善後の進路学習の単元と内容

職業・家庭では、主に軽作業の実践を行いながら仕事に取り組む姿勢や態度を学び、生活単元学習では、卒業後の進路について知ることや職場見学などの校外での学習を通して、働く様子を実際に体験し、振り返りを行う機会を含む内容にすると改善した。(図1)また、発達段階や生徒の居住地域を考慮し、身近で就労の可能性が高い施設を職場見学・体験場所に再設定し、校外での学習を行うこととした。(図2)

これらの指導計画の再検討によって、教科間、学年間での内容の重複が改善された。また、学部内で系統性をもたせるため、学習指導要領の職業分野の目標から、知・思・学の要素を含んだ重点目標を設定し、それをもとに各学年の実態に合わせたより具体的な目標として再度検討し、そこから学習内容を決定していくという形で段階的に学習できるようにするための大まかな体系を整えた。

図1 各学年（進路分野）の学習と単元、学習内容のすみ分け

〈職業・家庭〉	
個々の実態に合った軽作業の実践、身だしなみ、作業における適切な態度	
〈生活単元学習〉	
作業学習の振り返り、職場見学・体験の実施、仕事の意義や卒後の進路選択	

図2 職場見学・職場体験施設の変更

R 1 年度まで		R 3 年度から	
〈1年〉愛光園稲岡事業所	→	職場見学無し（作業について学習）	
〈2年〉こころみ学園	→	愛光園稲岡事業所	
〈3年〉金井実業	→	フロム浅沼・きたざと学園	

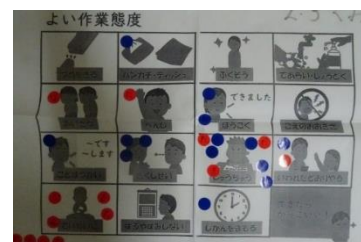
(2) 1年生

①研究の実際

1年生では、小学部から中学部へ「進学したこと」や中学部から追加された「作業学習」について考え、なぜ作業することや働くことが必要なのかについて取り上げることを優先した。これまで、「作業学習」での態度や評価については、各作業班の中でのみ完結していたため、振り返りを授業で取り上げる機会がなかった。しかし、身だしなみを正すことや丁寧な作業がなぜ必要なのかを生徒が理解し、自ら意識して行動できるようにするための時間が必要であると考え、校内実習、学校祭、学期末の終了後の3回に単元を分けて振り返りを行った。自分や友達が頑張っている様子を写真やその場での実演で見たり、作業日誌を活用して普段の作業の様子や評価を確認したり、徐々に成長していく姿を互いに共有することができた。

一方で、初めての作業活動であるため、技術面でうまくできなかつたり、長時間集中を維持することができなかつたりした際に、指導を受けることに対して戸惑う様子も多く見られた。学習を通して、なぜ丁寧な作業が必要なのかは理解できても、自分の不得意な部分を具体的にどうやって改善していくのか、どのような方法であればできるようになるのか、教師が適切に指導できなければならない。「頑張ってもできない」という気持ちから働くこと自体に苦手意識をもってしまわないよう、支援方法にさらに工夫が必要であると考えた。

領域・教科名		生活単元学習	単元・題材名	「作業態度の振り返りをしよう」
目標	・1学期の作業学習について振り返ることができる。(知・学) ・反省を踏まえて、2学期の作業学習での目標を考えることができる。(思・学)			
指導内容			指導及び支援上の留意点	
○挨拶 ・本時の学習内容と目標を知る。 「作業態度の振り返りをしよう」			・前回の授業までに自己評価を済ませておく。	
○作業日誌を確認する。 ・教師からのコメントと評価を確認する。 ・自分が頑張った点、改善すべきと指摘された点はどこかを理解する。 ・自己評価表と照らし合わせて、日誌の評価と相違がないか教師と確かめる。 ○作業態度表にシールを貼る。 ・良い評価のところ→赤シール、もっと頑張ろう→青シールを一枚ずつ作る。 ・前の白板に貼り、友達と評価を共有する。			・日誌には良かったところと改善が必要なところをピックアップし、生徒が分かるように付箋を貼っておく。 ・実態に合わせて、教師が日誌のコメントを読み上げ、振り返りを行う。 ・自己評価と日誌の評価に相違があった場合は、具体的にどのような場面でできていたのか、できなかったのか、生徒がイメージしやすいよう丁寧に伝える。 ・2色のシールを使い、◎と△の部分を目視的に分かりやすくする。	
○2学期の目標を立てる。 ・ワークシートを用いて、振り返りと目標を記入する。			・難しかったところを中心に、2学期の期間内で達成できる程度の具体的な目標を立てる。	
評価	・1学期の作業態度について振り返り、意識して取り組めた部分とより注意が必要な部分を把握することができた。 ・振り返りを基に、作業態度について具体的に目標を立てることができた。			



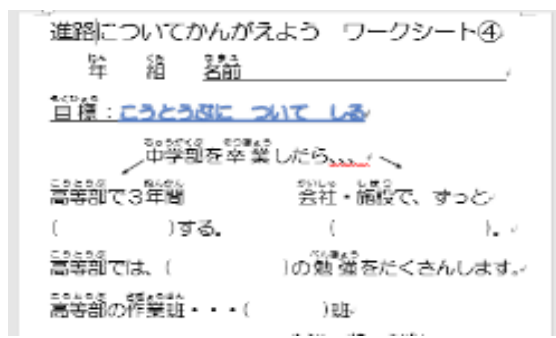
(3) 2年生

①研究の実際

1年次の作業学習を中心とした学習を受け、2年生では少し先の進路を見据えた学習内容を検討した。地域の福祉施設を訪れて作業を見たり、体験したり、高等部作業班見学を中心に、卒業生や先輩の働く様子から自分の進路や将来についてイメージしたり考えたりすることができるよう授業が構成されている。

職場見学では、「仕事」として留意すべきことを体感的に学ぶことができた。働くときに大切なことや勤務時間、給料について具体的に質問をした生徒もあり、意欲的に見学をする様子が見られた。また、見学を通して学習したことを職業・家庭の学習に反映させることで、①良い態度を学ぶ②他人の作業の様子を見て良いところに気付く③目標を立て、学んだことを生かして作業実践を行う④振り返りと反省という流れで段階的に学習を進めることができた。

実態に限らず、働く意義や職種など、広く「働くこと」について扱おうとすると、2年生の今、将来のために今何を考えるべきなのかが生徒に伝わりにくくなってしまう。限られた時数の中で「働く場所」についての選択肢（福祉的就労か一般就労か）や「扱う範囲」（高等部についてなのか、特別支援学校卒業後についてのかなど）を見直し、焦点を絞って今後も改善を行っていくことが必要である。

領域・教科名		生活単元学習	単元・題材名	進路について考えよう
目標	・ 中学部卒業後の進路について、高等部と就職があることや、高等部で学習する内容を知ることができる。(知) ・ 卒業後の進路について、自分はどうしたいか考えることができる。(思)			
指導内容			指導及び支援上の留意点	
○挨拶 ・ 本時の学習内容と目標を知る。 「高等部について知ろう」			・ 全員が揃い、準備が整ったことを確認する。	
○スライドショーを見て、高等部について知り、自分の進路について考える。 ・ ワークシートに取り組む。 ・ 適宜質問をし、教師とのやりとりを通して自分の進路について考えられるようにする。			・ スライドショーにはイラストや写真を使用し、視覚的に分かりやすいように工夫する。 ・ 生徒に質問したり、考えを聞いたりする場面を設け、主体的に学習に取り組めるように工夫する。 ・ 写真のスライドでは、何をしている場面かを問い、考えるきっかけを作る。	
○働くことについて知る。 ・ 施設で働くとはどういうことかを写真を見たり、教師の説明を聞いたりして知る。 ・ 必要に応じて、メモを取るよう促す。				
○次回の「高等部見学」について知る。 ・ 高等部作業班見学に行く班や順番、約束などを知る。				
○振り返り ・ 「高等部について、分かりましたか？」の質問に答える。			・ 本時の学習について質問し、振り返ることができるようにする。	
評価	・ 高等部の内容、特に作業班について興味をもったり、将来どのような生活をしていくのかを考えて質問に答えたりすることができた生徒が多かった。			

(4) 3年生

①研究の実際

中学部3年生では、1、2年生よりも進路学習の単元が多く設定されていて、主に自分の居住地周辺の福祉施設を知ることによって卒業後の進路にはどのようなものがあるのかを学習した。3学期には職場体験もあり、近隣の福祉施設に行き様々な仕事を体験することで、教師とは違った大人との関わりや、実際に仕事に取り組む中で仕事の大変さや楽しさを経験できるように進めている。

今回取り上げた「進路について考えよう」では、中学部卒業後の進路について高等部進学、福祉就労、一般就労とパンフレットや写真を用いて、分かりやすく違いを学習することができた。居住地域の施設についての調べ学習については、主にパンフレット等を活用するグループとタブレットを使用しインターネットで検索して調べるグループに分かれ活動した。タブレット操作に時間が取られ情報収集（仕事内容や所在地等）する時間を確保することが難しかった。また、教師の支援が多くなり、生徒の主体的な活動につながりにくかった。ICT教材の適切な活用や日頃からのタブレットを操作する機会を増やしていくことで効果的な活動につながると考えられるため、工夫や改善が必要と思われる。

課題研究を通して、PDCAサイクル（計画→実行→評価→改善）の実践の重要性を実感できたため、今後も授業を振り返りながら指導の改善・工夫に取り組んでいきたい。

領域・教科名		生活単元学習	単元・題材名	進路について考えよう
目標	・自分の住んでいる地域の施設についてインターネットを使ったり、パンフレットを見たりしてまとめることができる。(知・思)			
指導内容			指導上の留意事項	
○挨拶をする。 ・めあての確認をする。 「担当する施設について調べよう」 ・前時で決めた担当施設について確認する。			・当番に注目したり、姿勢を正したりできるように言葉掛けをする。 ・本時のめあてについて確認することで、見通しをもって授業に臨めるようにする。	
○担当する施設について調べる。 ・インターネットを使う生徒、施設や事業所のパンフレットを見て調べる生徒に分かれる。 ・ワークシートに施設の写真を貼ったり、施設名、住所、作業内容などを記入したりする。			・自分の調べる施設について、拡大した白地図（前時で作成済み）を提示しながら地図上での場所や担当者について確認する。 ・インターネットを使い調べる生徒を抽出し、3－1教室へ移動し、タブレットで調べる。インターネットを活用することで、パンフレットだけでは分からない情報を調べたり、写真を見たりできるようにする。 ・インターネットでの調べ学習が難しい生徒には各施設のパンフレットを事前に準備し、それを基に、住所や作業内容などを教師と一緒に確認し、プリントに記入できるようにする。 ・プリントに記入する際、自分で記入できる生徒、視写で記入する生徒、なぞり書きで記入する生徒など、実態に応じた支援を適宜行う。	
○本時の振り返りを行う。 ・めあてを達成できたか確認する。			・まとめられたワークシートを提示しながら振り返ることで、めあてを達成できたか確認できるようにする。	
○挨拶をする。 ・当番が号令を掛ける。			・当番に注目したり、姿勢を正したりできるように言葉掛けをする。	
評価	・自分の住んでいる地域の施設について場所や作業内容などをプリントにまとめることができた。			

6 まとめと今後の課題

今回の研究を通して、高等部の作業学習見学や福祉施設の職場見学・体験を絡めながら自分の進路について考える内容にしたことで、生徒たちが実体験になぞらえながら、職業や進路に興味関心をもつことができたように思われる。段階的な学習内容に変えたことで、身近な世界から地域社会に視点が広がり、自分もその社会の一員として貢献できるのではないかという意欲につながり、実践での成果が見られたのではないかと考える。

本研究では、学習内容のすみ分けや学年の系統性の整理を軸に据えていたが、研究を進める中で、「1年生の職業・家庭で、タオル畳みの軽作業に焦点を当てて学習したことで、2年生の生活単元学習の職場見学でタオル畳みを見学した際、興味関心をもって見学したり、意欲的にタオル畳みを体験してみようという場面があったりした。」「生活単元学習で学校祭の販売に向けて学習したことにより、働くことでお金をもらえる喜びや、働くこと自体の楽しさに気付く生徒が多くいた。それによって、生活単元学習での進路分野でも関心が高まった。」など、各教科や各教科等を合わせた指導が相互に作用して、生徒の理解を深めたり、関心・意欲を高めたりしているのではないかと感じた。

今後の課題としては、各教科等における進路分野の学習をきちんと網羅できているかを意識して指導したり、それを学校生活全般に応用する指導力を身に付けたりすることが課題ではないかと考える。キャリア教育の視点からも、中学部段階における「実生活に生かそうとする態度」とは、自分の姿を振り返って将来を見据え、今やるべきことに気付くことができたり、目標を設定して活動に取り組んだりすることであると考え、学部内で共通理解を図ってきた。しかし、進路学習といっても、「進路とは何か」という漠然とした問いから、将来を考える上でどんな選択肢があるのか、働くことや仕事をする上で具体的に何が大切なのかなど、含まれる内容は幅広い。その中で、生徒が中学部の3年間で何を重点的に学ぶのか、発達段階ごとに何が理解できるようになればいいのか指針を示し、見通しをもって主体的に学習できるようになることが必要である。今回の実践を通して、指導計画作成の時点では見えなかった生徒の反応や、進路への興味関心を踏まえて、高等部での進路につなげるための学習になっているかなど、各学年での評価と検討を重ねながら今後も授業作りを進めていくこととする。

Ⅲ 自立活動シートを活用した目標設定と指導実践

小学部・中学部・高等部（重複障害学級）

1 研究主題

「自立活動シート」を活用した目標設定と指導実践

2 研究主題設定の理由

自立活動の指導は、障害による学習上または生活上の困難を主体的に改善・克服しようとする取り組みを促す教育活動であり、発達段階や障害の特性に即して指導することが基本である。

本校では、令和2年度に本校版「実態把握シート」の作成を行い、個別の指導計画作成において活用し指導を進めてきた。その際、指導グループのケース会議で指導目標の設定や指導内容、指導の手立て等を検討し、実践の振り返りや評価を行うとともに、シート活用上の課題や改善点などをあげ、シートの整備を進めてきた。

そこで本研究では、個に応じた指導のさらなる充実を図るために、重複障害学級の児童生徒に適した自立活動シートになるよう改訂を行い、活用していきたい。改訂された自立活動シートを活用し、多視点からの実態把握を通して、児童生徒の実態を適切に捉え直すとともに、指導すべき課題を整理し、新学習指導要領に基づいた指導の改善・充実に取り組みたい。またその際、指導グループでの事例検討会を充実させ、実態把握シートにより洗い出した中心的課題から、今指導すべき最適な目標を設定することを要点としての検討を進めていきたい。

本研究では事例検討会での検討・改善を中心に研究を進めることで、課題の捉え方や指導目標の設定、指導の手立てを指導グループで共有し、児童生徒に主体的な取り組みを促していきたいと考え、本主題を設定した。

3 研究目的

- (1) 通常学級の児童生徒を対象に作成した「自立活動シート」（実態把握シート、課題抽出シート）を重複障害学級の児童生徒に適したものになるよう文言を改訂する。改訂したシートを活用し、児童生徒の実態を適切に捉え直す。
- (2) 整理された指導すべき課題（中心的課題）から、児童生徒の障害の特性に合った目標が設定できるようにするために、事例検討会を通して実践研究する。
- (3) 事例研究において指導目標や指導内容及び指導方法を評価・分析し、児童生徒に主体的な取り組みを促していくための実践となるよう改善を図っていく。

4 研究方法及び計画

- (1) 小学部低学年ブロック・小学部高学年ブロック・中学部ブロック・高等部ブロックでグループを構成し、重複障害学級版「実態把握シート」の内容・文言を検討する。また、上記ブロックごとに各1事例の事例研究に取り組む。

(2) 内容

- ア 重複障害学級の児童生徒に適した「自立活動シート」を作成する。
- イ 改定された「自立活動シート」を活用し、各ブロックで対象児童生徒を選出し、実態把握から指導目標を設定するまでのプロセスに重点をおいて研究する。
- ウ 明確になった目標をもとに、具体的な指導内容、手立て、指導体制を検討し実践を進める。その際、事例検討会において指導計画の妥当性を検討し、指導の効果を評価する手続きをグループで共有しながら実践を検証する。
- エ イ・ウの実践を考察し、成果と今後の課題について検討する。

5 研究の実際

(1) 重複障害学級版「自立活動シート」の作成

- ① 児童生徒に適した実態把握シートを作成するため、従来の自立活動シートを活用してみたの課題及び活用しやすさについて検討を進めた。
- ② 自立活動シートを活用してみたの意見・課題をまとめた。その際、重複障害学級という観点からの課題として、実態を正確に反映させることのできるような細やかな選択肢や、「意欲」を評価できるようにするためにはどのような文言が良いかなどの意見があがった。
- ③ 以下に、本研究において作成した「重複障害学級版自立活動シート」(一部抜粋)を掲載する。

ア 健康の保持

健康の保持				目次へ	次へ	補足説明
○ 0	△ 0	× 0				
①生活のリズムや生活習慣の形成に関すること				評価		
【生活】覚醒と睡眠のリズムが整っている			○ △ ×			
【生活】呼吸が安定している			○ △ ×			
【生活】食に興味を持って、意欲的に食べることができる。			○ △ ×			
【生活】自分に合った食形態の食事を摂ることができる。			○ △ ×			
【生活】食べ物を噛んで食べることができる			○ △ ×			
【生活】必要な水分を摂ることができる			○ △ ×			
【生活】排泄のリズムが整っている			○ △ ×			

イ 心理的安定

心理的な安定				目次へ	次へ	補足説明
○ 0	△ 0	× 0				
①情緒の安定に関すること				評価		
【情緒】喜怒哀楽の感情それぞれを何らかの方法で表出できる。			○ △ ×			
【情緒】好きな活動があり、集中して取り組むことができる。			○ △ ×			
【情緒】初めての活動でも、安定した気持ちで取り組むことができる。			○ △ ×			
【情緒】過去に失敗したことのある活動に対しても、安定した気持ちで取り組むことができる。			○ △ ×			
【情緒】自分の思いと違うことに對しても折り合いをつけて応じることができる。			○ △ ×			
【情緒】行動の修正が求められたときに、受け入れることができる。			○ △ ×			
【情緒】行動の修正が求められたときに、落ち着いて受け入れることができる。			○ △ ×			

ウ 人間関係の形成

人間関係の形成					次へ	補足説明
○	△	×	目次へ			
0	0	0				
①他者との関わり基礎に関すること				評価		
【他者基礎】特定の教師からの呼名や呼びかけに対して気付くことができる。			○ △ ×			
【他者基礎】特定の教師からの働き掛けを受け入れて反応することができる。			○ △ ×			
【他者基礎】特定の教師以外からの呼名や呼び掛けに対して気付くことができる。			○ △ ×			
【他者基礎】特定の教師以外からの働き掛けを受け入れて反応することができる。			○ △ ×			
【他者基礎】特定の教師に関わりを求めることができる。			○ △ ×			
【他者基礎】特定の教師以外に関わりを求めることができる。			○ △ ×			
【他者基礎】友達への関心がある。			○ △ ×			

エ 環境の把握

環境の把握					次へ	補足説明
○	△	×	目次へ			
0	0	0				
①保有する感覚の活用に関すること				評価		
【保有感覚】触れあいや揺れの働きかけを感じて、快・不快の表情をする				○△×		
【保有感覚】教師と一緒に関節を曲げたり伸ばしたりすることができる				○△×		
【保有感覚】教師の言葉掛けを聞いて関節を曲げたり伸ばしたりすることができる				○△×		
【保有感覚】目で見ながら手足などを動かすことができる				○△×		
【保有感覚】人から触れられても拒まない				○△×		
【保有感覚】自分から人に触れることができる				○△×		
【保有感覚】自分からいろいろなものに触れ、それらの感覚を受け入れることができる				○△×		

オ 身体の動き

身体の動き				次へ	補足説明
○	△	×	目次へ		
0	0	0			
①姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること				評価	
【運動基本】 仰向けで頭、手、足を動かすことができる。			○△×		
【運動基本】 寝返りをするすることができる。			○△×		
【運動基本】 うつ伏せで手足を動かすことができる。			○△×		
【運動基本】 座位の姿勢を取ることができる。			○△×		
【運動基本】 ずりばいの姿勢を取ることができる。			○△×		
【運動基本】 四つんばいの姿勢を取ることができる。			○△×		
【運動基本】 膝立ちをするすることができる。			○△×		

カ コミュニケーション

コミュニケーション					次へ	補足説明
○	△	×	目次へ			
0	0	0				
①コミュニケーションの基礎的能力に関すること				評価		
【コミュ】いろいろな刺激に対して、快・不快の表出ができる。			○ △ ×			
【コミュ】話しかけている相手や相手の示している物を見ることができる。			○ △ ×			
【コミュ】指さしや身振り、視線、具体物の提示により求められていることを理解し、それに応じた行動ができる。			○ △ ×			
【コミュ】要求があるときに何らかの手段で伝えようとする（クレーン）。			○ △ ×			
【コミュ】要求があるときに何らかの手段で伝えようとする（発声）。			○ △ ×			
【コミュ】要求があるときに何らかの手段で伝えようとする（指さし）。			○ △ ×			
【コミュ】要求があるときに何らかの手段で伝えようとする（サイン・身振り）。			○ △ ×			

(2) 指導実践 ※個別の事例のため概要のみ掲載

新たに作成した重複障害学級版「自立活動シート」を活用し、事例研究を進めた。具体的には、事例検討会において明確な指導目標の設定、具体的な指導内容、手立て、指導体制を検討した。指導の過程で実践を評価・改善していく手続きをグループで共有しながら実践研究を行った。事例の概要は以下のとおりである。

① 事例1

課題抽出シートでは6区分全てが相互に関連している結果になったが、その中からコミュニケーションを中心的課題と捉え、指導実践に当たった。

指導当初は受け身な姿勢が多く、教師が気付いてくれるのを待っていることが多かったが、スイッチを用いて発信すると教師に即時に対応してもらえる経験を積んだことで、自ら働き掛けることも増え、コミュニケーションをとることに対する意欲を高めることができた。

しかし、発語やサイン等の使用が難しいため、普段のやりとりの場面において、本人からの発信があっても、細かな部分まで正確に気持ちを読み取れないことがある。伝わらないもどかしさを解消していけるよう、クイックトーカーやICT機器の読み上げアプリを活用するなどしてコミュニケーション力の育成を図っていけるようにすることが課題である。

② 事例2

コミュニケーションを中心的課題と捉え、特に適切な挨拶について指導に当たった。本人に合った言葉掛けや「声の物差し」や「ご褒美シール」などの教材の工夫によって、本児が適切な声の大きさに気付くことができた。また、学習を積み重ねた結果、相手を意識し伝えようとする気持ちが芽生え、コミュニケーション力の向上につながった。担任や他教師に称賛されることで喜びを感じ、向上心をもって取り組むことができる児童であったため、日々繰り返して行える挨拶の指導は定着しやすかった。引き続き、場面に応じた声の大きさ、適切な言葉遣いで児童と関わり、丁寧な言葉で会話ができるよう指導していきたい。

また、他の児童への挨拶が少なかったことが課題としてあげられたため、今後は児童同士で挨拶ができるよう場面設定を行っていく。

③ 事例3

課題抽出シートではコミュニケーションが他の項目との関連が多かったが、グループ内で検討を重ねた結果、本生徒が意欲的に取り組めること、反応が明確な評価につながること、教師の働き掛けや工夫が本児の行動変容を促しやすいことなどから、「身体の動き」を中心的課題と捉え指導に当たった。

指導の手順や教材、環境設定、支援の仕方などについてグループ内で評価し、検討した結果を再実践する、ということを繰り返した結果、落ち着いた動きでスプーンを扱えるようになり、生活の中での「食」の自立度が向上した。

一方で手の微細な動きに課題があることも再確認し、様々な場面で今後も指導に当たるなどの新たな課題も洗い出すことができた。

④ 事例4

コミュニケーションを中心的課題と捉え、指導に当たった。意思を伝えるため目的をもってカードを取るものの定着は難しかったが、カードを手取るなどのアクションを起こすことで、教師に意思を伝える経験を積むことができた。その結果、目的の場所まで主体的に向かう場面も増え、受け身的な姿勢から、主体的な発信を促すことができ、コミュニケーション力の向上につながる経験を積むことができた。

しかし、写真カードの感触が好きなこともあり、手に取ったからといってトイレなのか感触を楽しみたいのか判断が難しい場面もあった。トイレ以外にも本生徒の好きな場所の写真を使うなど選択肢を増やし、生徒の主体的な動きを高めていきたい。

6 まとめと今後の課題

本研究では児童生徒の実態を適切に捉え直すことを目的に、本校独自の「自立活動シート」（実態把握シート・課題抽出シート）を作成した。作成にあたっては自立活動の6区分27項目について児童生徒の実態に即した内容に文言等を改訂し、精査してきた。作成の過程では「障害に起因する機能的な問題で評価が下がってしまうのではないか」、「意欲が評価できるようなものがあったとしても良いのではないか」などの意見も挙がり、改めて児童生徒の実態を広い視点で考えることができた。

また、完成した本校独自の「自立活動シート」を用いて、洗い出した個々の中心的課題から目標の設定、指導の手立てを見出し、事例検討会をとおしてグループで共有した。シートを用いたことで、教師の指導経験の多い少ないに関係なく同じ視点で考えることができた。また、中心的課題が6区分とどのように関わっているのか客観的に捉えることもできた。グループで話し合うことで多くの視点から児童生徒を見ることができ、グループ内で共有することで児童生徒により良い指導・支援に当たることができた。

今後は、更に児童生徒に主体的な取り組みを促していけるよう自立活動シートを実態に即した内容に適宜改訂すること、またシートの結果に加え複数の教員で様々な視点から実態を捉えることを継続し、児童生徒の学習上または生活上の困難を改善できるよう指導に当たっていきたい。

IV 職業教育に関する授業実践

高等部（通常学級）

1 研究主題

職業教育に関する授業実践

2 研究主題設定の理由

高等部では学部目標を「卒業後の自立に向け社会生活や職業教育に必要な知識や技能及び態度を体験や実践を通して育てる」と設定し、この目標達成に向けて、平成25年度より職業教育における効果的な指導や評価の在り方について学校課題として研究してきた。その中で、教材・教具などの共有、作業班の工程分析、チェックシートの作成、各学習指導年間計画における職業教育に関する内容の洗い出しなどを行ってきており、個々の課題を明確にすることや個に応じた指導を大切にしてきた。その気運の中、学校生活全般で職業教育を意識する土壌が育まれてきた。

更に令和2年より教育課程研究として、研究主題C（社会的・職業的自立にむけて必要となる資質・能力を着実に育成するための個に応じた効果的な指導と評価の在り方）の研究推進を行うことになった。

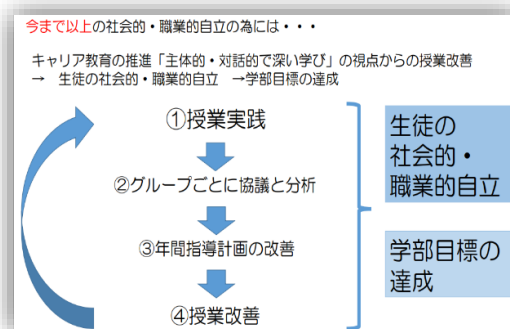
職業や作業学習の授業はもとより各教科などの学習や学校生活全体の中で、生徒の社会的・職業的自立に向けた取組を、発達段階に沿って横断的に検討していくこととなった。学校全体の取組のほか、高等部では、学校教育の要である授業の見直しに主眼を置くこととした。これまで以上に個々の生徒の社会的・職業的自立を促しながら、キャリア教育推進の柱である主体的・対話的で深い学びを考慮した授業を展開するには、これまでの研究成果をもとに、授業実践・改善のサイクルの中で指導と評価を検討していく形が最善であると考えた。

「個に応じた指導」を工夫し「主体的・対話的で深い学び」のある、職業教育を意識した授業実践を積むことより、効果的な指導や適切な評価を考えていきたいという思いから本主題を設定した。

3 研究方法

研究グループを四つ（課程1、課程2 1年、課程2 2年、課程2 3年）のグループに分ける。研究授業を研究グループごとに実施し、①指導内容 ②生徒の主体的な学び③個に応じた指導、について協議、分析する。定期的な協議の中で職業教育に関する内容分析や年間指導計画への反映の仕方について話し合う。

更に2年目には、1年目の研究に加え、キャリアパスポートや実習反省を活用したり、その結果を生かしたりした授業を計画する。

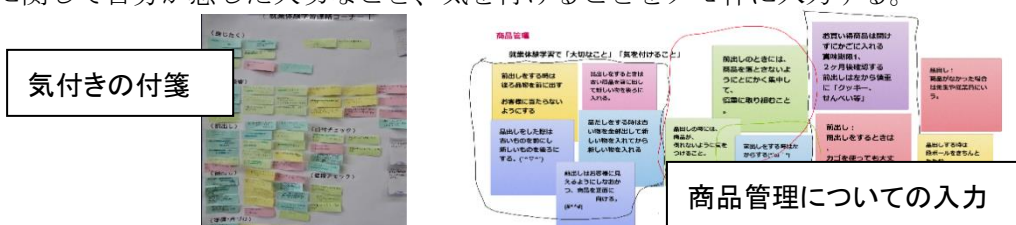


4 研究の実際

(1) 実践事例

【令和3年度】

① 事例1 (高等部 課程1 2年の実践から)

単元名	流通・サービス 「就業体験の振り返りをしよう」
展開のポイント	・タブレットを用い、1学期の就業体験学習を通して、「接客・コミュニケーション」に関して自分が感じた大切なこと、気を付けることをメモ枠に入力する。  気付きの付箋 商品管理 商品管理についての入力

【主な協議：指導内容】

- ・教師も生徒もタブレットを活用して、全員参加型の授業で良かった。
- ・みんなの前で発言することが難しい生徒にとっても良い。
- ・就業体験の反省が書いてある付箋も活用して進めていることが良かった。生徒が就業体験での経験を振り返る機会にもなった。

② 事例2 (高等部 課程2 1年の実践から)

単元名	生活単元学習 「校内実習に向けて」
展開のポイント	・クラス全員でクイズの答えについて考える。(話し合い) ・クイズの答えを発表する。

【主な協議：生徒の主体的な学び】

- ・クイズを通して、生徒同士の話し合いの場がもてたことで主体的な活動となった。
- ・クラスによっては、進行役と書記役の生徒が出て、主体的に話し合いができていた。

③ 事例3 (高等部 課程2 2年の実践から)

単元名	生活単元学習 「働くために」
展開のポイント	・働くために大切なことや必要なことを確認する。 ・大切な理由を考える。(グループディスカッション)

【主な協議：生徒の主体的な学び】

- ・大切な理由や良い影響を考える際のグループ分けについて、均等に分けるか、実態別に分けるかを考えた結果、実態別に分けた。
- ・Aグループは様々な意見が出て、活発な話し合いになった。
- ・Bグループは教師主導ではあるが、教師とのやりとりを通して、意見を言ったり、イラストや言葉を貼ったりするなど、主体的に活動する場面が見られた。

【主な協議：年間指導計画の修正】

- ・感染症対策のため、課程全体で計画していた授業をクラス単位で実施した。人数が多い方が、実態や進路希望によって、よりグループ活動が活発になることが考えられる。感染症の状況に応じて、課程全体の授業、活動とする。

④ 事例 4 (高等部 課程 2 3 年の実践から)

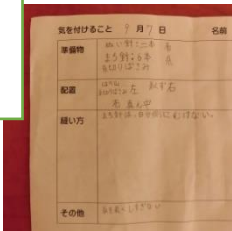
単元名	生活単元学習「実習報告会に向けて」
展開のポイント	・発表の練習をする。(1回目) ・発表を振り返る。 ・発表の練習をする。(2回目)

【主な協議：指導内容】

- ・事前の授業で実習の振り返りを元に原稿を作成していたので、自分のものとして発表に取り組めた。
- ・本番に向けて模擬的な内容であって良かった。
- ・電子黒板やタブレットを現在のように利用することで、よりスムーズに発表できるようにする。

【令和4年度】

⑤事例 5 (高等部 課程 1 2 年の実践から)

単元名	家庭科 「布を用いた製作」
展開のポイント	・安全の確認・作業準備 前時に 作成したメモ  準備物や配置を確認して作 業開始  ・製作、片付け

【主な協議：職業教育との関連】

- ・最近実施した職場見学での作業環境やいつもの作業学習との対比など、もう少し多く言葉掛けし、意識させてもよかった。
- ・学校生活の中で、思い出せる場を定期的に設定し、生徒が今の学習と関連付けて考える機会を確保する。

⑥事例 6 (高等部 課程 2 1 年の実践から)

単元名	作業学習 「就業体験学習」
展開のポイント	・今回の就業体験を通して、「職場における適切な言葉づかいや行動」に関して自分が感じた大切なこと、気を付けることを付箋に書く。    ・振り返りシート (仕事内容・できるようになったこと・課題・今後の学習に生かしたいこと)の内容を発表する。

【主な協議：指導内容】

- ・生徒同士で話し合う場面設定がなかった。
- ・今回の就業体験の気づきを付箋に書いた後、グループで発表し合う場面を設定する。

⑦事例7（高等部 課程2 2年の実践から）

単元名	生活単元学習 「働くために②」
展開のポイント	・キャリアパスポートを活用して振り返りをする。 ・チェックシートを入力する。（前回のチェックシートも確認しながら入力する。） ・チェックシートの結果を確認し、自分の課題を知る。 ・課題に対しての改善方法を考え、発表する。  【1学期の振り返り】 自己評価した項目が グラフ化されている  資料を手掛かりに シートの入力 

【主な協議：個に応じた指導】

- ・発語がない生徒とはプリントのイラストを指さしたり、指数字やサインを用いたりしながらコミュニケーションが取れた。
- ・実態が様々ではあるが、共通してより多くの視覚支援や言葉掛けが必要になる。

【主な協議：職業教育との関連】

- ・キャリアパスポートを活用して昨年度の実習の目標や課題を振り返った後に、今回の実習の振り返りを行ったことでそれぞれの成長が感じられた。自分の成長を確認し、次の実習や活動への意欲をもたせるという意味で有効な活用の仕方であった。

⑧事例8（高等部 課程2 3年の実践から）

単元名	生活単元学習 「社会人の生活」
展開のポイント	「消費税と所得税」 ・様々なパターンの税表示を確認する。 ・消費税が10%であることを知り、実際に計算をする。 「税金の使い途と生活の関わり」 ・税金の使い途を調べ、ワークシートに記入し、発表する。 

【主な協議：生徒の主体的な学び】

- ・主体的な学習の観点から話し合いの場面を設定していく。話し合うための予備知識を得るためにはどのような指導が必要かと考えていく。また、話し合いの場面での教師の役割なども考えていく。
- ・税金の使い途を考えて税金のない世界についてまとめて考えたが、一つ一つのケースについて使い途を考え、使い途と、もしそれに税金が使われなかったらと考えていく。

【主な協議：職業教育との関連】

- ・産業現場等における実習で何らかのもの作りに関わっている生徒も多く、そのものにも税がついて販売されているとつなげて考えられると良い。

5 まとめと今後の課題

令和3年度から、学習指導案の中の「単元の指導目標」、「単元の評価規準」に記入し授業を実践することにした。そのことで教師は、『何を理解しているか、何ができるか』、『理解していること・できることをどう使うか』、『どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか』を生徒が主体的に考え、表現することに対して適切な支援をすることを意識した授業を実践した。授業実践後は、グループごとに、「指導内容」、「生徒の主体的な学び」、「個に応じた指導について」、「年間指導計画の修正について」の4項目について、授業者の反省と生徒の変容、そして授業参観者からの客観的な評価も踏まえながら振り返りをした。そこで成果と今後の課題が明らかになり、その後の授業改善につなげることができた。このPDCAサイクルの繰り返しが、年間指導計画の改善、授業内容の改善とつながっていく。つまりキャリア教育の推進に当たっても「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善へとつながると考える。

この令和3年度のまとめに基づいて、令和4年度もグループ毎に指導方法の研究と授業実践を行った。令和4年度の実践では、キャリアパスポートや実習日誌、チェックシートなどから、生徒自身が以前の自分を振り返って目標や課題を考えながら学習を行うことを意識して授業を行った。また職業教育の学習を再考し、各授業の中でそれとの関連についても意識できるよう協議することとした。

事例5では、作業学習や産業現場等における実習等で繰り返し行ったり見聞きたりしてきた作業環境の設定を汎用化するために、自分で適切で安全な学習環境を考え整えて、実習を行う授業を設定した。前時のメモなどから自分の取組の仕方や注意すべきポイントを考え、よりよく活動できる環境を作ってから活動するという流れがどの学習においても活用できることを学んだ。汎用化には更に多くの場面を設定していく必要がある。

事例6では、1年生の就業体験の事後学習であった。自分ができたことや難しかったことなどを、自己評価や友達や教師から見た視点など総合的に振り返ることで、自己理解や自己啓発につなげた。みんなで考えること、練習することで自分では気付けないことに気づき、お互いを刺激し合い、高め合いながら学ぶことができた。

事例7では、産業現場等における実習・校内実習において、よりよいPDCAサイクルを生徒自身で確認できることを目指す授業を展開した。キャリアパスポート等を用い、これまでの自分となりたい自分を考えた上で実習に臨んだ。事後学習としての本授業では、ICTを活用し自分の取組や課題がグラフ化され視覚的にも明確になったことで、次への意欲につなげることができた。

事例8では、外部指導者を招いて行った租税教室や労働講座の学習内容の定着を図ることを目的に生徒それぞれが理解しやすいような事例や言葉掛けを考えた授業を行った。適切な内容の設定で、生徒の意欲や理解を引き出すことができたが、更に対話的な活動に発展させるための指導について課題も明らかになった。

特に職業や実習についての内容を扱う学習では、自分ができていること、もう少し頑張ろうと思うところがそれぞれの授業の中の工夫により明確になったことで、実習等に取り組む姿勢に改善が見られた生徒もいた。また、その振り返りの学習では、目標を達成した実感をもち、自信をもって「〇〇ができた」と話す様子や具体的な自分の課題を発見し発表する様子を見ることができた。

また、学校生活の中や他の授業の中でも課題となったことに触れていくことにより、きっかけを作るだけでやるべきことに気付いたり、自分から「〇〇のときと一緒にですね」と積極的に挨拶や準備、片付け、報告などに取り組もうとしたりする姿が見られるようになってきた。

自分で理解して行動した結果が「適切にできた」と実感できたり、それを他者から評価されたりすることが、生徒の主体的な学習への取組が強化される一番の要因となる。その「できた」を積み重ねるための個に応じた教材研究や支援、言葉掛けの在り方、研究授業の中でのT1・T2等の役割分担、押さえるべき指導内容の共通理解など、グループ内で共に考えて授業に臨んだ結果、それぞれの授業で教師が目標・目的としたことが達成された。

今後、生徒が将来の自分の職業生活、社会参加のために自ら自分を高めていこうという気持ちをもって学校生活を送るためには、今回研究として行った授業の改善を、日常の授業の中に少しでも反映させていく必要がある。

今後も年間指導計画をさらに良いもの、生徒の実態に合わせたものに工夫・改善していくとともに、それぞれの生徒に応じた指導の工夫を多くの目で検証しながら進めていきたいと考える。

あ と が き

今年度は、以下の4つの研究グループごとに副主題を設定して研究を進めてきた。

- I 自立活動の指導における実態に即した指導内容の設定と主体的な取組を促すための指導方法の工夫及び評価の在り方
～自立活動シートを活用した目標設定と指導実践～

小学部 通常学級

- II 生活単元学習の進路分野について、各学年の系統性を踏まえた授業実践と評価

中学部 通常学級

- III 自立活動シートを活用した目標設定と指導実践

小学部・中学部・高等部 重複障害学級

- IV 職業教育に関する授業実践

高等部 通常学級

新学習指導要領の趣旨に則り生きる力を育む教育を推進するため、栃木県特別支援学校教育課程研究集会において、A自立活動、B各教科等を合わせた指導、C社会的・職業的自立に向けた指導に関して研究主題が設定された。各学部、研究グループで児童生徒の課題や教育ニーズに応じて中心となる主題を選択し、研究テーマを設定し二年間研究に取り組んできた。いずれも児童生徒の主体的・対話的な学びの実現に向けて、丁寧な実態把握を行い、児童生徒の興味関心や強みを生かすとともに、学習環境や学習内容を工夫し、授業改善について検討・実践してきた。今年度の研究の成果を生かしながら、今後も児童生徒一人一人の教育ニーズに対応する適切な指導を支える教育課程編成および指導の充実を図っていききたい。

この研究記録について、特別支援教育のより一層の充実のため、本校教職員の資質向上のため、御意見、御指導をいただければ幸いである。